

調査報告

つくば市水守桜塚古墳 2013 年度発掘調査概要

滝沢 誠・齊木 誠・福田 誠
久米美夏・ブライ・フリバル・ペトラ

I. はじめに

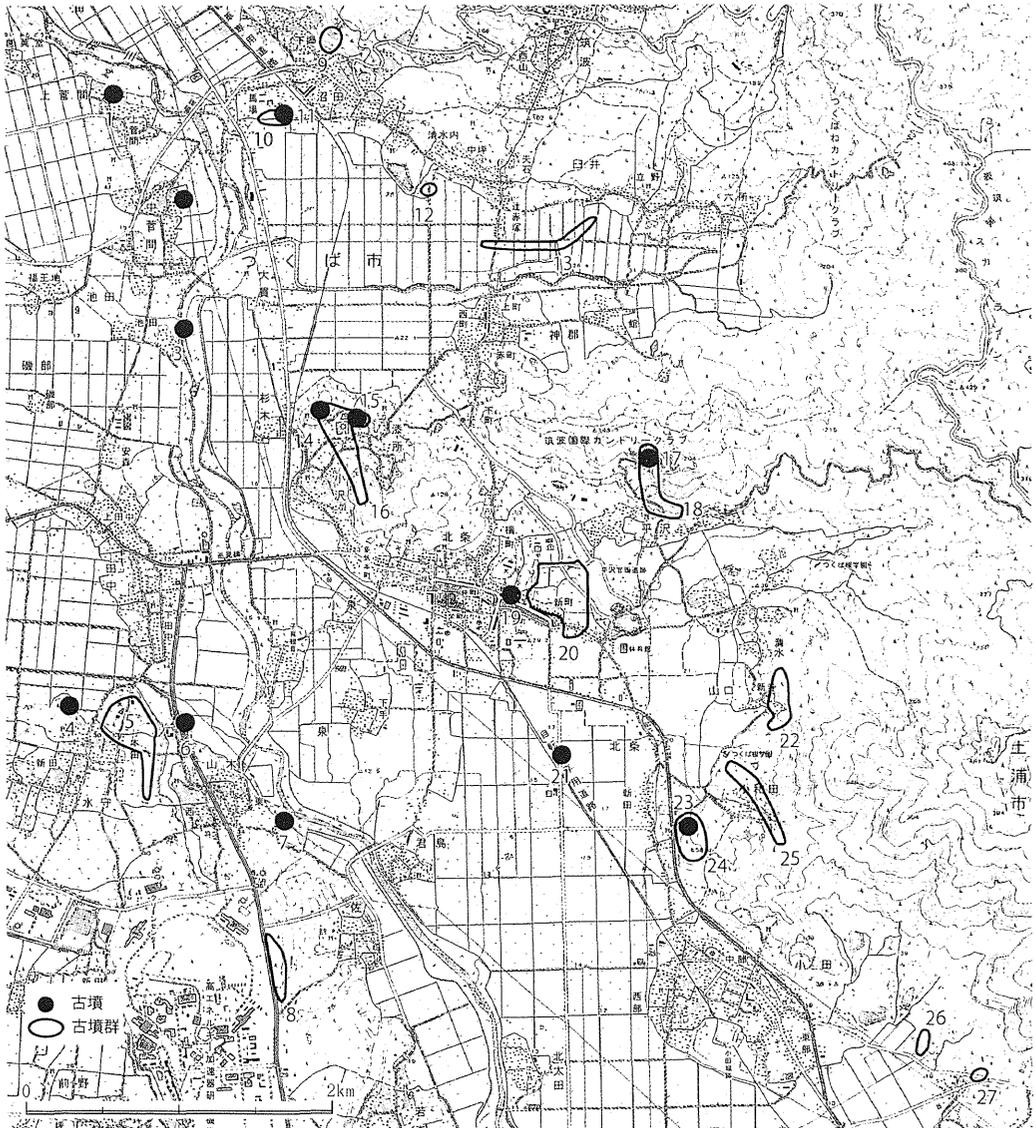
水守桜塚古墳¹⁾は、茨城県南部を代表する前期古墳の一つである。筑波山の西側を南流して霞ヶ浦に注ぐ桜川の西岸には、標高 20～30 m の筑波台地が南北にひろがっている。その北東部には北に向かって舌状に突き出したいくつもの小台地が認められ、桜塚古墳はそうした舌状台地先端部の標高 25 m 付近に立地している（第 1 図 4）。

桜塚古墳が位置する桜川中流域には多くの古墳が分布しているが（第 1 図）、とくに桜塚古墳が所在するつくば市水守付近には大型古墳が集中的に認められる。桜塚古墳より 500 m ほど東の舌状台地上には前期古墳として知られる山木古墳（第 1 図 6）、さらに山木古墳と本古墳の中間に位置する舌状台地上には水守古墳群（同図 5）が存在する。山木古墳は、1968 年（昭和 43）に筑波研究学園都市学園東大通りの道路工事のために発掘調査がおこなわれた墳丘長 48 m の前方後円墳で、その築造年代は古墳時代前期末頃と考えられる。また、水守古墳群では墳丘径 32 m と 35 m の円墳 2 基が確認されており、鉄剣や鉄鏃の出土が知られる水守 2 号墳の年代は古墳時代前期に遡るものとみられる²⁾。

桜塚古墳では、1979 年に筑波大学による本格的な発掘調査が実施されている。その際、墳頂部では長大な割竹形木棺を納めたとみられる粘土槨が検出され、棺内からは、変形四獣鏡 1、石釧 1、短剣 1、刀子状鉄器 1 のほか、多数の玉類が出土した。また、14ヶ所に及ぶ墳丘のトレンチ調査にもとづき、桜塚古墳は墳丘長 30 m 前後の前方後方墳である可能性が高いと推定された（蒲原・松尾 1981）。こうした調査成果をふまえ、桜塚古墳は古墳時代前期に営まれた桜川中流域最古の有力古墳とみなされるようになり、東日本の多くの地域と同様に当地域でも最初に築かれた有力古墳は前方後方墳であると認識されるようになったのである。

しかし、以上の調査成果のうち、墳丘の形態と規模については十分な調査データが得られていたわけではなく、現墳丘の状況を見る限り、その規模については再考の余地があるものと思われた。すなわち、以前の調査では、後円部のトレンチ調査によって確認された盛土の範囲を墳丘と認定しているが、見かけ上の墳丘は盛土が確認された高さよりもさらに下方につき、盛土部分に加えて地山を削り出した墳丘が存在している可能性が予想されたのである。

こうした見方の正否を確かめるために、筑波大学では 2012 年 12 月に桜塚古墳の発掘調査を



第1図 桜塚古墳と周辺の古墳
(国土地理院発行2万5千分の1地形図「筑波」及び「上郷」をもとに作成)

1. 上菅間赤渕古墳 2. 中菅間稲荷塚古墳 3. 池田古墳 4. 水守桜塚古墳 5. 水守古墳群 6. 山木古墳
7. 山木坊ノ下古墳 8. 山木古墳群 9. 国松東坪古墳群 10. 沼田古墳群 11. 八幡塚古墳
12. 白井燧ヶ池古墳群 13. 白井古墳群 14. 土塔山古墳 15. 漆所大塚山古墳 16. 漆所古墳群
17. 平沢1号墳 18. 平沢古墳群 19. 北条八坂神社古墳 20. 北条中台古墳群 21. 北条大塚古墳
22. 山口古墳群 23. 甲山古墳 24. 甲山古墳群 25. 小和田古墳群 26. 小田古墳群 27. 大形古墳群

33年ぶりに実施した。そこでは、見かけ上の墳丘裾部に狙いを定め、墳丘の西側と南側の合計3地点でトレンチ調査をおこなった。その結果、くびれ部付近を含む墳丘西側のトレンチ(F・Gトレンチ)では地山削り出しによる墳丘裾部が検出され、その平面形は弧状に復元されることが明らかとなった。また、舌状台地の高位側にあたる墳丘南側のトレンチ(Hトレンチ)では、地山を掘り込んだ溝状の落ち込みが検出された。これらの調査成果から、桜塚古墳は従来推定されてきたような墳丘長30m前後の前方後方墳ではなく、墳丘長約59mの前方後円墳であると考えられるようになった(滝沢ほか2013)。

筑波大学では、2012年の調査によって従来の認識に大きな見直しが迫られることとなった桜塚古墳について、さらなるデータを獲得することを目的として、つづく2013年にも発掘調査を実施した。本稿は、その調査概要を記したものである。なお、発掘調査は、筑波大学人文・文化学群人文学類の「考古学実習」ならびに同大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻の「先史学・考古学基礎実習」として、2013年12月2日～12月19日の計16日間実施した。調査担当者(実習担当者)および調査参加者は以下のとおりである。

調査担当者：滝沢 誠(筑波大学人文社会系・准教授)

常木 晃(筑波大学人文社会系・教授)

調査参加者：ブライ・フリバル・ペトラ、サーリ・ジャンモ(筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻)、牧 武尊(同国際地域研究専攻)、久米美夏、明石萌子、稲泉麟太郎、惠羅純加、川島裕貴、齊木 誠、田中直樹、谷口佳鈴、平間亮明、福田 誠、上ノ山拓己、大城薫穂、木村真奈、近藤彰彦、櫻井幸一郎、佐藤瑤生、杉山貴子、宮本純平、吉野涼太、五十嵐あゆみ、大城陶也、笠見智慧、河嶋優輝、福田遥奈、森田なつみ(筑波大学人文・文化学群人文学類)

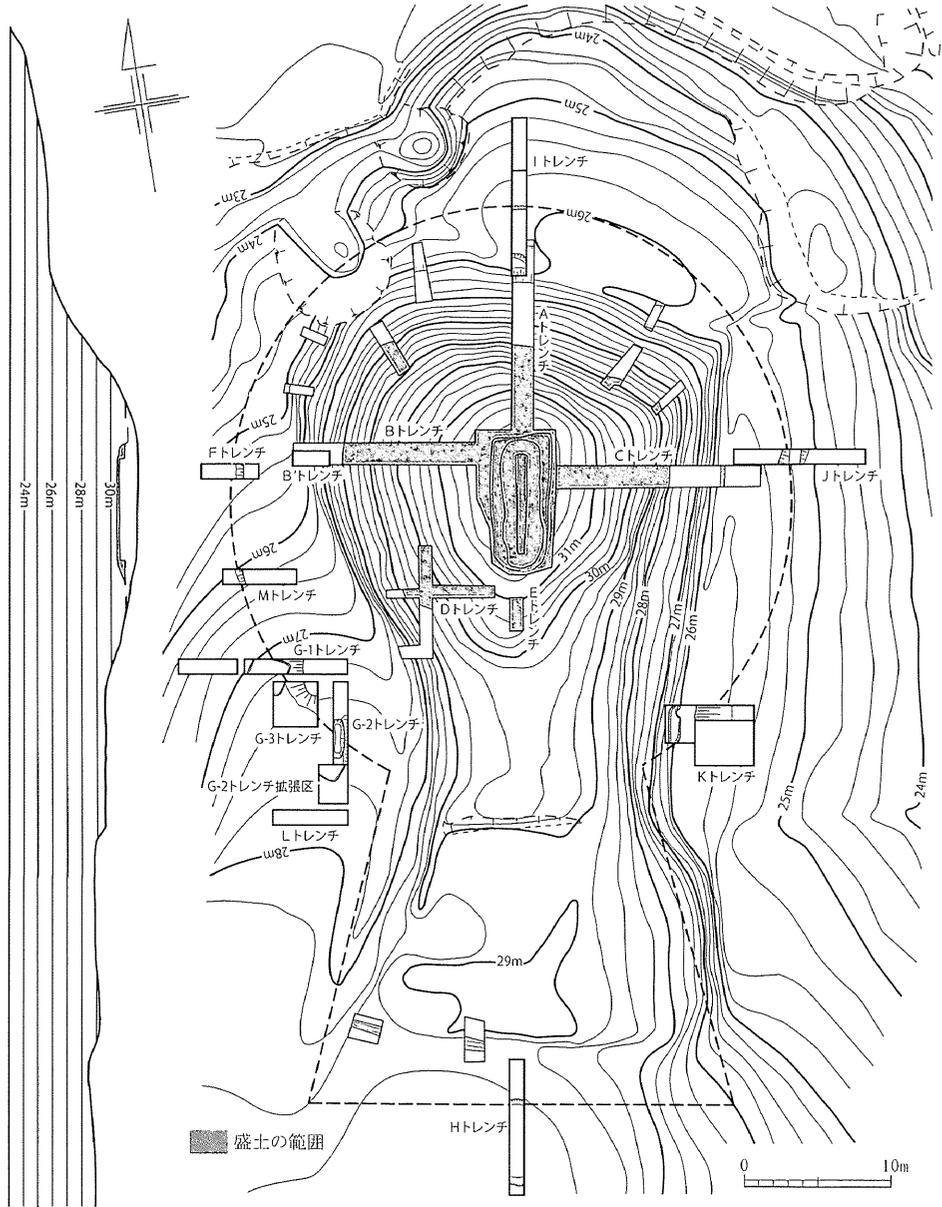
(滝沢 誠)

II. 調査の概要

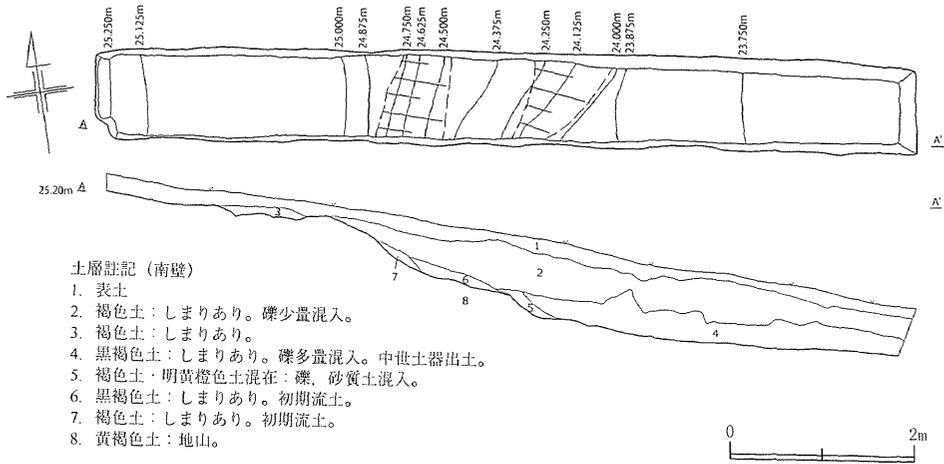
1. 調査の方法

桜塚古墳の現状については、1979年の調査当時と比べて大きな変化はなく、前方部上の墓地を除く部分は、全体が雑木に覆われている。また、墳丘の西側に沿うように市道(未舗装)がつうじるなど、ほぼ南北に主軸をおく墳丘の周囲は大半が急斜面をなし、全体として大きな改変を被っている状況がみてとれる。

今回の調査では、2012年の調査で確認された墳丘の形態と規模をさらに詳しく把握することを目的とし、合計6地点でトレンチ調査を実施した(第2図)³⁾。前年度の調査では、主丘部が円形となることをほぼ確認したが、その点をさらに確かめるために、墳丘東側にJトレンチ、墳丘西側にMトレンチを設定した。また、前年度の調査で前方部前端を確認したことから、墳丘全長の把握を目的として墳丘北側にIトレンチを設定した。さらに、くびれ部から前方部にかけての形状を明らかにするために、墳丘東側にKトレンチ、墳丘西側にLトレンチ及び



第2図 つくば市水守塚塚古墳調査概要図 (S = 1 : 500)



- 土層註記（南壁）
1. 表土
 2. 褐色土：しまりあり。礫少量混入。
 3. 褐色土：しまりあり。
 4. 黒褐色土：しまりあり。礫多量混入。中世土器出土。
 5. 褐色土・明黄橙色土混在：礫、砂質土混入。
 6. 黒褐色土：しまりあり。初期流土。
 7. 褐色土：しまりあり。初期流土。
 8. 黄褐色土：地山。

第3図 J トレンチ平面図・断面図 (S = 1 : 80)

G-2 トレンチ拡張区を設定した。これらの調査区をあわせた今回の調査面積は約 56㎡である。
(滝沢 誠)

2. I トレンチ

墳丘規模を明らかにするため、1979 年の調査で設定した A トレンチの延長線上に幅 1.0 m、長さ 10.5 m の I トレンチを設定し、主丘部後端の検出を試みた。なお、トレンチの北側 3.5 m の範囲は、調査期間の関係で表土の除去のみにとどまった。墳端の確認は、堆積土が砂質状であったため平面的な検出にはいたらず、最終的にはトレンチの西壁及び東壁の断面観察から墳端を確認する方法によらざるをえなかった。

調査の結果、両壁ともトレンチの南端から 4.2～4.6 m 付近に地山を掘り込んだとみられる高さ 20～30cm の傾斜面が認められた。この傾斜面の端部は標高 22.8 m で、主丘部の後端である可能性が考えられる。前年度に H トレンチで検出された前方部の前端を基点とし、本トレンチで検出された地山の傾斜面を主丘部の後端と仮定すると、墳丘の全長は約 59.6 m となる。

本トレンチからは、弥生土器片 3 点、かわらけ片 1 点、不明土師器片 1 点が出土したが、明確に古墳に伴う遺物は確認できなかった。
(齊木 誠)

3. J トレンチ（第3図）

主丘部東側の墳端を確認することを目的として、墳丘東側に幅 1.0 m、長さ 9.0 m のトレンチを設定した。トレンチの西端では、地表面より約 0.2 m の深さで明黄色の地山と思われる層が検出され、東側へ 2.8 m 地点まで地山が激しい攪乱を受けている様子が認められた。

調査の結果、トレンチ西端から 2.8～4.4 m の範囲に地山を削り出した傾斜面が確認された。この傾斜面は、わずかな緩斜面を挟みながら上段斜面と下段斜面にわけられ、全体の高さは約

0.9 m、端部の標高は 24.0 m であった。また、下段斜面の東側にはトレンチ東端に向かって下降する緩斜面がつづき、周溝の外縁部とみられるような立ち上がりは認められなかった。この緩斜面に直接堆積していた第 4 層からは中世の土器片が出土しており、墳丘の周囲は中世に大きく改変されたものと考えられる。ただし、先述の上段斜面には墳丘構築後の初期流土とみられる堆積土（第 6・7 層）がわずかに残存していたことから、中世の改変に伴う掘り込みは下段斜面に限定され、上段斜面は本来の墳裾部をとどめているものと判断される。

本トレンチでは、中世の土器片のほかに、縄文が施された弥生土器の底部片、線条痕のある土器片などが出土したが、古墳に伴う遺物は確認できなかった。（久米美夏）

4. K トレンチ

2012 年の調査では、G-1～3 トレンチにおいて西側くびれ部付近の墳裾部が確認された。そこで、それらのトレンチと墳丘主軸を挟んで対称となる墳丘の東側に K トレンチを設定し、東側くびれ部の確認をおこなうこととした。

当初 K トレンチは、4.0 m × 4.0 m の範囲で掘り下げをはじめたが、後述する大規模な溝状遺構の存在が想定された時点で、トレンチ北辺側の幅 1.0 m、長さ 4.0 m に範囲を限定して調査を進めた。最終的に、この範囲を K-1 トレンチとし、後に設けた拡張区を K-2 トレンチとした。

調査の結果、K-1 トレンチ西端では、標高 25.1 m で地山とみられる黄褐色土が検出された。一方、それより東側には地山面を確認することができなかったため、さらに深く掘り下げを進めたところ、地山面は東側に向かって急激に下降し、トレンチ西端から 2.5 m 付近の標高 24.0 m で平坦面に移行してトレンチ東端に達することが明らかとなった。この落ち込みは深さ 1 m を超える大規模なもので、その最下層からは後述する中世の土器が出土した。調査範囲が狭いため全体像は明らかでないが、この遺構は墳丘東側の台地縁辺部に設けられた中世の溝状遺構（堀）とみられ、J トレンチで検出された掘り込みも一連のものである可能性が考えられる。

K-2 トレンチは、K-1 トレンチの西側に連続するかたちで設定した幅 2.0 m、長さ 2.5 m のトレンチである。K-1 トレンチで確認できなかった墳端の検出を目的としたもので、K-1 トレンチとあわせて結果的に L 字形の調査区となった。

調査の結果、トレンチの西辺に沿うように急傾斜をなす地山面が検出された。この急傾斜面は現墳丘の墳裾部に相当するもので、標高 25.9 m から標高 25.4 m にかけて認められるが、その東側は先述した溝状遺構の上端につづく緩傾斜の地山面となっていた。その緩傾斜面には所々にくぼみが認められ、その直上にあたる標高 25.1 m 付近からは近代の義歯が出土した。

以上の事実から、K トレンチ付近は少なくとも中世と近代に大きな改変が加えられ、本来のくびれ部は残存していないことが明らかとなった。（ブライ・フリバル・ペトラ・滝沢 誠）

5. L トレンチ

前方部西側の墳端を検出するため、幅 1.0 m、長さ 5.0 m の L トレンチを設定した。しかし、

墳端と思われる立ち上がりは一切確認できなかった。地表面下約 0.4 m で検出された赤褐色の地山はトレンチ東端から 1.6 m ほどにわたり緩やかに傾斜し、その層が途切れると、褐色（砂質）の地山が 3.9 m ほどにわたり緩やかに傾斜しているのみであった。

本トレンチでは、弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土したが、明確に古墳に伴う遺物は確認できなかった。（齊木 誠）

6. G-2 トレンチ拡張区

L トレンチにおいて前方部の墳端を検出できなかったため、前年度に調査した G-2 トレンチの南側に幅 2.0 m、長さ 2.5 m の拡張区を設定し、墳端の検出を試みた。

調査の結果、墳端と思われる立ち上がりは確認できなかったものの、トレンチの北側から東西約 1.5 m、南北約 1.2 m の方形状の遺構が検出された。この遺構は、トレンチの北壁及び西壁の奥につづいているものとみられ、前年度調査で G-2 トレンチ南端部において検出された西向き傾斜面は、前方部西側の墳端にかかわるものではなく、本遺構の一部である可能性が高まった。本遺構は、南東コーナー部に竈と思われる焼土と粘土塊が認められたことから、堅穴住居跡と考えられる。

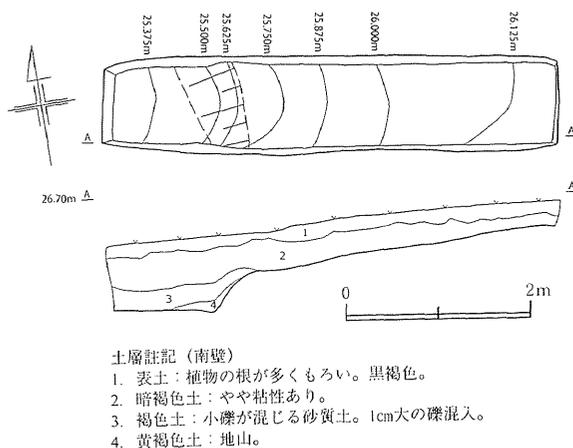
本トレンチでは、住居内の竈直上から甕の口縁部片などが出土し、トレンチ内からも多数の土器片が出土した。しかし、明確に古墳に伴う遺物は確認できなかった。（齊木 誠）

7. M トレンチ（第 4 図）

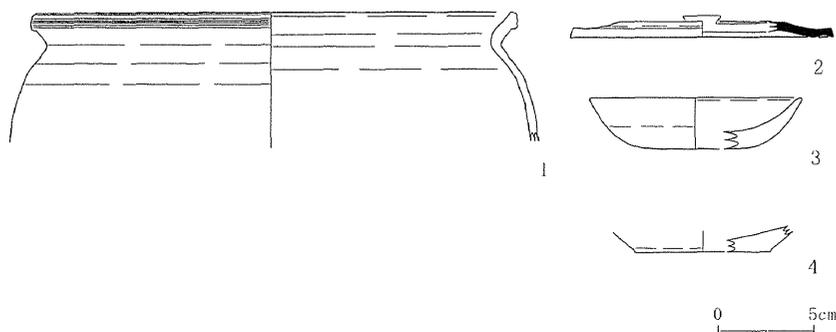
主丘部の形状を確認するため、墳丘の西側に M トレンチを設定した。墳丘主軸に直交する東西方向のトレンチで、幅 1.0 m、長さ 5.0 m の調査区とした。

トレンチの東端では、約 30cm 掘り下げた標高 26.3 m 付近で地山とみられる黄褐色土が検出され、そこから西に緩斜面が確認された。さらに、東端より 3.5 m ほど西に進んだ標高 25.8 m の地点で地山の落ち込みが認められた。この落ち込みを地山削り出しによる墳裾部と想定して掘り下げを進めたところ、地山はさらに西側に向かって傾斜することが確認された。この傾斜面はトレンチ東端から約 3.8 m、標高 25.6 m の地点で終わり、平坦面に移行していた。

本トレンチでは調査区を斜めに横断するように地山を削り出した墳裾部が検出された。この墳裾部は、前年度に調査した F トレンチ及び



第 4 図 M トレンチ平面図・断面図 (S = 1 : 80)



第5図 平安時代以降の出土遺物 (S = 1 : 4)

G-1・G-2 トレンチの墳裾部と一連のものと考えられ、その平面形は全体として弧状をなすものと考えられる。(福田 誠)

Ⅲ. 出土遺物

今回の調査では、明らかに古墳時代のものと思われる遺物は出土しなかった。一方、G-2 トレンチ拡張区やK トレンチでは、平安時代以降の遺構にかかわる土器が出土した(第5図)。

1はG-2 トレンチ拡張区第1層の焼土上より出土した土師器甕である。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部はいわゆる「常総型甕」の基本とされる、わずかな内側上方へのつまみ出しが確認できる。内面には横方向のロクロナデが認められ、外面には指頭痕が残っている。2はG-2 トレンチ拡張区第2層の焼土上から出土した左回りのロクロ成形による須恵器蓋である。1の土師器甕のすぐ下から出土している。3はJ トレンチ第3層から出土した手づくねかわらけの丸底皿である。胴部内・外面には横方向のナデ、口縁部にはナデが施されており、底部は厚めに成形されている。4はK トレンチ第3層から出土したロクロ糸切平底の土師器である。

以上の1～4と同様の土器は周辺遺跡にも認められ、1の土師器甕はつくば市島名熊の山遺跡から出土している。1の法量と器形を島名熊の山遺跡の土師器甕と比較すると、1は稲田義弘の分類による第16期(10～11世紀)に認められる(稲田2002)。2は出土位置から1と同時期の須恵器蓋の可能性はある。3は法量と器形より、比毛君男による編年の中世Ⅲ期(13世紀後葉～14世紀前半)、川村満博による編年のⅡ期(13世紀後葉～14世紀前葉)に該当するものと考えられる(比毛2009、川村2007)。また、4は比毛編年の中世Ⅰ期(12世紀～13世紀前葉)に、川村編年のⅠ-1・2期(11世紀後半～13世紀中葉)に該当するものとみられる。

1・2は竪穴住居跡の竈直上から出土しており、同住居跡に伴う遺物と考えられる。前年にG-1・G-3 トレンチで検出された竪穴住居跡と時期が近いことから、墳丘西側には11世紀前後の住居が複数営まれていた可能性が高い。墳丘東側では、溝状遺構(堀)の最下層から3と4が出土しており、溝状遺構の年代は12～14世紀の可能性はある。(福田 誠)

Ⅳ. まとめ

2012年度の調査の結果、墳丘長30m前後の前方後方墳と推定されてきた桜塚古墳は、墳丘長約59mの前方後円墳と考えられるようになった。今回の調査は、そうした理解をさらに裏づけるために実施したものであり、全体としては所期の目的をほぼ達成することができた。

主丘部については、墳丘西側のMトレンチで墳端が検出されるとともに、墳丘東側のJトレンチでも墳端が検出されたことにより、後円部とみてよいことがあらためて確認された。すなわち、Mトレンチは前年度に調査を実施したFトレンチとG-1トレンチの中間に設定したものであり、これらのトレンチで検出された墳端の位置関係から、西側のくびれ部に向かって弧状にのびる墳端の存在を疑う余地はなくなった。また、Jトレンチで検出された墳端はFトレンチの墳端と埋葬施設の主軸線を挟んでほぼ相対する位置にあることが明らかとなり、これにより後円部の規模をより正確に復元するための有効な手がかりを得ることができた。さらに、Iトレンチの断面観察から把握された墳端の位置は、他のトレンチの調査成果から復元される後円部の形状・規模との整合性が高いことも確かめられた。

前方部については、Kトレンチ、Lトレンチ及びG-2トレンチ拡張区において墳端の検出を目指したが、必ずしも十分な成果は得られなかった。すなわち、東側くびれ部の検出を目的としたKトレンチでは、中世の大規模な溝状遺構により墳裾部が失われるとともに、近代以降の改変が墳丘に及んでいることが明らかとなった。一方、前方部の西側については、LトレンチとG-2トレンチ拡張区で墳端の検出を試みたものの、その痕跡を確認することはできなかった。これらの事実をふまえるならば、前方部西側の墳端は、現在の墳丘により近い位置（道路部分の直下）に求められる可能性が高いと考えられよう⁴⁾。

墳丘規模については、後円部後端を平面的に検出できなかったものの、各トレンチの調査成果により後円部の東西径は約38mに復元することができる。これは、前年度の復元案をほぼ追認するものであり、今回の調査結果から桜塚古墳は墳丘長59.6mの前方後円墳と判断することが可能になった。

以上のように、今回の調査では前年度の調査成果を裏づける追加的な墳丘のデータを得ることができた。前方部の側縁については今回も十分なデータを得ることができなかったが、その墳端は現墳丘に近い位置に求められる可能性が高くなった。そうした認識に誤りがなければ、第2図に破線で示したように、桜塚古墳の前方部幅は後円部径の2/3程度に復元することができる。また、前方部長は後円部径の1/2程度となる。前年度の概報においても言及したように、こうした前方部長がやや短いタイプの前期前方後円墳は桜川流域に点在しており⁵⁾、今後そうした古墳を含めた墳丘形態の検討は、桜塚古墳の性格を解明する一つの手がかりとなろう⁶⁾。

今回の調査では明確な古墳時代の遺物は出土しなかったが、前年度に出土したパレススタイル壺は、桜塚古墳の年代がより古く遡る可能性を示している。この点を含め、前年度からの二度に及ぶ再調査は桜塚古墳をめぐる従来の理解に大きな見直しを迫るものであり、当該地域の古墳時代史についてもあらたな事実認識をふまえた再検討が必要となろう。（滝沢 誠）

謝辞

今回の調査に際しては、桜塚古墳の地権者の方々にご快諾をいただくとともに、水守地区の皆さんからは多方面でのご協力をいただいた。また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会には、調査の実施について全般的なご理解とご協力をいただいた。さらに現地では、下記の諸氏からも有益なご助言をいただいた。末筆ではあるが、記して感謝を申し上げたい。

五十嵐聡江、石橋 充、小野寿美子、塩谷 修、谷口陽子、長谷川教章、花坂 哲、
比毛君男、日高 慎、三宅 裕、茂木雅博（五十音順・敬称略）

註

- 1) 埋蔵文化財の登録名称は「水守桜塚古墳」であるが、本稿では「桜塚古墳」の通称を用いる。
- 2) 水守2号墳出土の鉄鏃には、柳葉式のほかに定角式とみられるものが含まれている（つくば市文化財管理センターにおいて実見）。なお、2013年と2014年には、水守古墳群内の発掘調査がつくば市教育委員会により実施され、古墳の周溝とみられる溝から古墳時代前期の土器が多量に出土している。この遺構は、前方後方墳もしくは前方後円墳とみられ、桜塚古墳との年代的関係が注目される。
- 3) 1979年調査の概報では掲載図面の方位を嚙北で表示しているが（蒲原・松尾1981）、本稿の掲載図面では真北で表示することとした。なお、桜塚古墳の測量図（第2図）については、部分的な補足・修正を加えつつ、1979年調査当時のものを使用している。
- 4) 墳丘西側の市道部分については、諸条件が整わないため、現状では調査の実施にいたっていない。
- 5) 類似した特徴をもつ前期前方後円墳としては、筑西市灯火山古墳、つくば市山木古墳、かすみがうら市田宿天神塚古墳などが認められ、それらは桜川流域から霞ヶ浦北岸域にかけて分布している。一方、桜川下流域から霞ヶ浦南岸域及び北浦沿岸域にかけては、土浦市王塚古墳、潮来市浅間塚古墳、鹿嶋市伊勢山古墳などのように、前方部が開かず直線的な形態をもつ前期前方後円墳が分布している。
- 6) 常陸における前期古墳の墳丘形態については、日高慎（日高1998）、塩谷修（塩谷2000）、井博幸（井2014）らによる分析があり、桜塚古墳の墳丘形態を考える際にも参考になる点が多い。

参考文献

- 井 博幸 2014 「中野富士山古墳の測量調査—ボランティア活動による調査・整備の事例—」『茨城県考古学協会誌』第26号 109-129頁。
- 稲田義弘 2002 『熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第190集 茨城県教育財団。
- 蒲原宏行・松尾昌彦 1981 「桜塚古墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学 21-27頁。
- 川村満博 2007 「中世初期から中期の常陸国のかかわりについて」『菟玖波—川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集—』川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会 229-238頁。
- 塩谷 修 2000 「霞ヶ浦沿岸の前方後円墳と築造規格」『常陸の前方後円墳（1）』茨城大学人文学部考古学研究室 116-136頁。
- 滝沢 誠ほか 2013 「つくば市水守桜塚古墳2012年度発掘調査概要」『筑波大学先史学・考古学研究』第25号 81-95頁。
- 比毛君男 2009 「土浦市域の中世土器様相」『土浦市立博物館紀要』第19号 1-20頁。
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」『第3回東北・関東前方後円墳研究会〈シンポジウム〉前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会 105-122頁。